

年頭の戯言と戦前生保の年賀状によるご挨拶

年をとったせい、公と私のけじめが気になって仕方がない。たとえば、ネット上の記事を見ると、誰がどう言った、誰が何をした、という記事があふれている。ツイッターは、その最たるものかもしれない。個人が、いわゆる既存のメディアの力を借りることなく、社会に対して大きな影響力をもちうる時代となった。トランプ大統領は、これをうまく利用した最初の合衆国大統領だ。SNSでの発言は「私」の領域なので、大統領としての公式的な発言ではないという。何が「公」で、何が「私」なのだろうか。

エマニュエル・カントの生きた時代においては、大統領としての公式的な発言が「私」であり、何事にも制約されない理性にもとづいた発言ができるのが「公」の場であった。もっともトランプ氏のSNS発言が「理性にもとづいた」ものかどうかは疑わしい。

現代日本の「公」と「私」も、カントの時代とは異なっている。仕事上のことが「公」であり、家庭のことは「私」とするのが常識である。文科省の役人が息子を医学部に入学させようと工作することは公私混同と非難される。サラリーマンが、仕事を家庭に持ち帰るのも、公私混同といわれることもある。

カントの時代の「公」と「私」について、少し説明が必要かもしれない。カントによれば、役人や牧師などはその役割を誠実に果たす義務があり、その義務はそれぞれの生活のため必要であるので「私」の領域である。これに対して、理性に従って自由な議論ができる場こそが「公」であるという。デカルトに「世界論」の執筆を思いとどませたのが、ガリレオの宗教裁判の結果であった。当時においては、理性に従った自由な議論を公表することは命がけの行為であったのだ。近代社会が自由な議論の場を獲得するまでに長い時間がかかったのである。理性に従った自由な議論が容認される政治体制になると、従来の「公」は大学などの研究機関に属するようになり、かわって「万機公論に決すべし」という近代国家が「公」の座にすわることになった。これに対して、個人や家計が「私」と位置づけられることになったのである。

年賀状は「私」であるが、年賀状をだすことで、気の置けない議論ができるつながりを持った場の存在を再確認することもある。先日、高名な先生の偲ぶ会に出席させていただいたが、生前の先生とはほとんど直接にお話をしたことがないという、ある参列者のお話を聞いて、文字を通した学問のつながりの広さと深さにあらためて感銘した。人間は、文字という媒体をとおして理性の自由な表現の場を維持している。20年も30年も会っていない人との年賀状のつながりを、単に儀礼的なものとして、済ますわけにはいかないのではないか。

2019年の連載の最初から物々しく書き始めてしまったが、今回は、読者の皆様への新年のご挨拶がわりに、戦前の保険会社の年賀状からいくつか紹介しよう。手元に亥年の年賀状が1枚あった。明治44年亥年の万歳生命の年賀状である。猪の背景に日の出を配したものであるが、残念ながら猪の部分が退色してしまっていて読み取れないため掲載を断念した。

かわりに万歳生命の別の年の年賀状を掲載した。大正3年は寅年だったので、虎のプル

トイをもっている幼児が描かれている。大正 7 年のものは第一次世界大戦が終結する直前だったこともあり、日の丸が描かれ戦勝気分が伝わってくる。三つ目のものは、大正 9 年の年賀状である。貯蓄型生保のイメージが表象されたものである。いずれも同一の画家による作品であると思われるが作者は不明。

万歳生命は、東京高商の出身者が中心となって経営された会社であったが、大きな発展はせず、最終的には、日華生命に合併されるという運命を迎えた。次に掲載したのは、昭和 5 年の年賀状である。この画像でみるかぎり、内容は日華と万歳生命の合併の通知であるが、表書きをみると、謹賀新年とあり、年賀状を兼ねたものである。

その他、年賀状らしい画像を二枚を一枚掲載した。福寿生命は、社名からして、おめでたい名前であるが、毎年、宝船をあしらった年賀状を作製していた。掲載の画像は昭和 5 年の年賀状である。海のかなたから日の出がさしているが、日の出も年賀状の重要なモチーフである。次の中央生命（相互会社 5 社合併により昭和生命となる相互会社）の昭和 3 年の年賀状は日の出を中心に、凧を配したデザインの明るいものである。

2018 年は、災害の多い年であったが、2019 年は無事平穩の明るい年になって欲しいという願いをこめて、戦前の生保会社の年賀状をお届けいたします。

大 祝 祭 大

新嘗祭 十月廿三日	大長節 祝日 十月十七日	神嘗祭 十月廿七日	秋季奉斎祭 九月廿四日	天長節 八月三十日	明治天皇祭 七月三十日	神武天皇祭 四月三日	春季奉斎祭 三月廿一日	紀元節 二月十一日	元始祭 一月三日	新年宴會 一月五日
十二月六日 十三日 二十日 二十七日	十一月一日 八日 十五日 廿二日 廿九日	十月四日 十一日 十八日 二十五日	九月六日 十三日 二十日 二十七日	八月二日 九日 十六日 廿三日 三十日	七月五日 十二日 十九日 廿六日	六月七日 十四日 二十一日 二十八日	五月三日 十日 十七日 廿四日 三十一日	四月五日 十二日 十九日 廿六日	三月一日 八日 十五日 廿二日 廿九日	二月一日 八日 十五日 廿二日 廿九日

日 曜 表

行 發 社 會 式 株 險 保 命 生 歳 萬



**且元年三正大
社會式株險保命生歳萬**



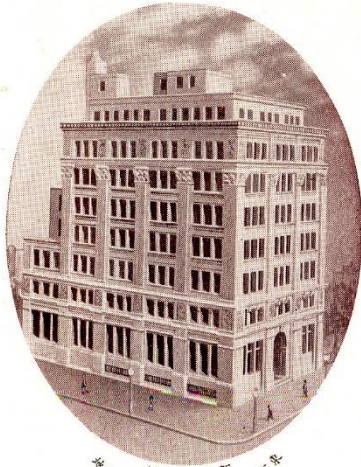
正 賀

善生

保 險

大 正 九 年 一 月 元 旦

日 曜 日		神 武 天 皇 即 位 紀 元 二 千 五 百 八 十 年		大 祭 祝 日	
一月五日	土	一月四日	日	元 始 拜	一 月 一 日
一月六日	日	一月五日	月	新 年 寧 會	一 月 三 日
一月七日	月	一月六日	火	紀 元 節	一 月 五 日
一月八日	火	一月七日	水	春 季 皇 靈 祭	二 月 十 日
一月九日	水	一月八日	木	神 武 天 皇 祭	三 月 廿 一 日
一月十日	木	一月九日	金	明 治 天 皇 祭	四 月 三 日
一月十一日	金	一月十日	土	天 長 節	八 月 卅 一 日
一月十二日	土	一月十一日	日	秋 季 皇 靈 祭	九 月 廿 三 日
一月十三日	日	一月十二日	月	神 嘗 祭	十 月 卅 一 日
一月十四日	月	一月十三日	火	天 長 節 祝 日	十 月 卅 一 日
一月十五日	火	一月十四日	水	新 嘗 祭	十 月 卅 三 日
一月十六日	水	一月十五日	木		
一月十七日	木	一月十六日	金		
一月十八日	金	一月十七日	土		
一月十九日	土	一月十八日	日		
一月二十日	日	一月十九日	月		
一月二十一日	月	一月二十日	火		
一月二十二日	火	一月二十一日	水		
一月二十三日	水	一月二十二日	木		
一月二十四日	木	一月二十三日	金		
一月二十五日	金	一月二十四日	土		
一月二十六日	土	一月二十五日	日		
一月二十七日	日	一月二十六日	月		
一月二十八日	月	一月二十七日	火		
一月二十九日	火	一月二十八日	水		
一月三十日	水	一月二十九日	木		
一月三十一日	木	一月三十日	金		



東京市本區橋通二丁目四番地
新屋社

芽出度御慈年遊はされ御祝福申上げます。
多年御春願を蒙りました日華萬歳兩社は資産充實加入者
本位の目的で昨年八月二十日を以て合併致し其名を日華
萬歳生命と改めました。合併しましても掛金其他一切の
御取扱は従前通りで少しも變りはありません。

尙近い中に上掲新社屋へ移轉の豫定で
工事を急かせて居ります運くも本年一
月末には移轉して事務一切は同所に於
て御取扱ひ申上げる事になります。
何卒此上とも御引立の程伏願致します。



